

たああ　　いいい

煙りも見えず雲もなく

たゆたう海が拡がっている

海の果てには　空があり

空の果てにも　空があり

「あなたは一生結婚しないつもりなの。そうじゃないで  
しょ。私はあなたよりずっと年上だし、誰とも結婚する  
気はないのよ。ねえ、いゝ人を紹介するわ。××高女出  
身の才媛で年もあなたと六つ違い、きつとあなたの氣に  
入るわ。あなたもそろそろ結婚するべきよ。いいえ、私  
とでなく、もっと若い人と。あつてごらんさいよ。私  
が機会をつくるわ」

ちえつ　三文小説め

風も起らず　波立てず

俺は怒らず　腹立てず

漂う小舟に

行先はない

「正月に來いという連絡受け取った。およその察しはつ  
いている。悪童どもが集まって、馬鹿騒ぎでもしよう  
というのだろう。こちらの身にもなつてくれ。三六五日の  
うちの短い休みじゃないか。お酒を飲んでくたびれてい  
るわけにもいかんよ。寝正月をするから覚悟しておけ。

以上、オワリ」

勝手にしやがれ

鏡の如き黄海

ではないから

時のまに曇りそめる

ということもない

「俺は駄目な奴だよ。それはね。良く判ってんだ。だけどね。あゝそうだ。俺は馬鹿な奴だよ。良く判ってんだ。だけどね。つまりだね。要するに……、おい聞いてんのかよ」

うるせえなア

勇敢な水兵なんて

現れっこない

平和な平和なお正月

陰謀を企らむ奴は

ブラウン管の中で毎日殺されてる

せめて俺も

調子外れのガラガラ声で

流行歌でもやらかすか

死んで しまい たああ いいい

## オルグよ

君は流れ星にすぎなかったが

坑道に棲む怨念の蝙蝠

下水溝の恥辱にまみれたどぶねずみ

の唄を聞いたことがあるか

「蒸気おろしの曲片盤で

いっちょよさせたがけちのもと」

輝かしい朝はまだ来ぬが

雨の夜の便箋に

灰色のインクでしたゝめられた

君の裏切りから

廃坑に閉じこめられて

十七年だ

僕らは戦争を知らないんです

僕らは革命を知らないんです

不幸な泰平の時代の可哀想な子です

だから

退屈なオナニーにふけるのです

などと甘えてみせる傲慢な美少年が

君の成長した息子だ

ベニヤ板で仕切られた薄暗い部屋で

すえくさい煎餅布団に転がって

坑夫の娘が腐れかけた股を開くとき

田畑を持たぬ農夫がそれを安く買うとき  
このえがらっぱい近親相姦のとき  
美智子様は矢張り美しいか

サイゴンの闇市で  
裸足の子供が

一切れのパンを盗んで馳け去るとき  
魚のはらわたにしみこんだ廃油の臭いに  
発狂した漁夫が網を切裂くとき  
ルーキー堀内はマウンドの英雄か

乱数表を紛失した  
暗号解読員はみじめだが  
彼の背後を

永遠の三番方かもしれぬ  
カンテラの列が通りすぎるのを  
見なかったか

盲いた坑夫と片腕の坑夫と  
坑夫をやめた坑夫とが  
怪魚に荒された海の底  
灰のかたまりの雲の下を  
なお生き続け  
さまよい歩く姿を見なかったか

とんちゃんば食いに行かんか  
マツカリば飲みに行かんか

海底の廃坑に 今もなお  
フランケンシュタインに似た

坑夫が生きているというニュースを  
誰かゞこっそりさゝやかなかったか

ひよわな密室

蛆の湧いた城

大地を持たぬ王国

君の敗北の遺産の数々

君はもう忘れてしまったか

カンテラに照らされた炭壁の輝きを

夜明けの坑口に吹いていた風を

『変革者』No.20 (S 42 / 6 / 24)

「詩・日野善太郎」

## この国

この父母

この家

この国

好きじゃないのにさ

この顔

この身体

この手

この足

頼んだわけじゃないのにさ

この国に生きている

この国で死んでゆく  
夜の重さにじっと耐えている

(前同)

待つ

むかし 女と橋のしたであう約束をして 雨にあい  
洪水で溺れて死んだ男の名は尾生

自分を賭けるべき 何かを、待って 日々を過し  
三十四才になって 恋人の墮胎の為に  
金策に走り廻っていた男の名はマチウ

じっと待つてはいられぬと思い 旅に出たが  
どこかで野たれ死にした男の名は

何を大袈裟に言うのだ

たかゞ煙草二本とコーヒー一杯

お冷やのお替りをしたゞけじゃないか

(前同)

音楽があつた。冷めかけたレモン・ティがあつた。漫然と街を歩いてみただけなのに、二人は少し疲れていた。女の傍らにはハンドバッグと紙包みがあつた。紙包みの中にはゴッホの複製画があつた。それは女の誕生日に男が贈つたものだつた。女の誕生日は一週間も前に終えていた。男も女も、四十になって、忙がしい生活をしてきた。どちらかの都合が悪くて、一ヶ月に一度あえないことさえあつた。

男の傍にも紙包みがあつた。紙包みの中は靴下だつた。今日は、ヴァレンタイン・デイなのよ。その紙包みを渡すとき、女はそう言つたのだ。男は今日が何の日だつたか忘れていた。去年は、ちょうど逆だつた。男が言い出すまで、女は気づかなかつた。今日はヴァレンタイン・デイなのよ。女はそう言つたとき、去年のことを思い出して、男は苦笑した。

二人は久しぶりであい、食事をし、心齋橋筋をぶらぶら歩き、喫茶店に入った。

音楽があつた。冷めかけたレモン・ティがあつた。二人は少し疲れて黙り勝ちだつた。その時、女はごきぶりのことを考えて板。この頃、炊事場にふえたあれを退治しなけりやいけない。ぼんやり、フロアに目を落としながら、考えるともなく考えていた。夜が更けて行き、男のくわえ煙草が、眠たげに煙りを漂わせていた。

## 死んだ海

「暗くても波の音が聞えるわ」  
と女が言った

耳をすましたが

私には聞えなかった

「ほら 潮の匂いがするわ」

と女が言った

死んだ海にも

匂いがあつて不思議はないが

この暗黒の中で 女よ

それが何になるというのだ

音も匂いも幻覚なのだから

手探りで生きて行くのだから

(前同)

## 海

海を見つめているときの僕は海

桜の花片が ひらひら ひらひら

ひらひら と散る山道にたち

吸いこまれてしまう 僕は海

町はずれのうらぶれたバアの



ソファに沈んでジンフィズを飲む僕は海  
どこまでも続きはるかな空に消える海

君の中に注ぎこむ僕は海

もはや 時間を失なつた海

かすむ海

煙る海

或いは 音のない深い海

光りもなく ゆれもせぬ 眠る海

うつゝともない たまゆらの

桜の花片が、ひらひら ひらひら

ひらひらと散る その束の間の海

風が吹けば 吹き散らされて

飛び去って行く僕は海

その匂い 母に似て

かすかな かすかな記憶が風にまじる

海は遠い 海は遠い

その遠さに のめり込むときの僕は海

波立たぬ真昼の夢

光の中に たゆたう僕は海

(前同)

### その気になれば

夜の中は様々

気軽に パンティを

脱ぐ女もいれば

重い甲冑の中で

老けこんで行く人もいる

勇氣なんてものは  
野蠻な男たちの見栄  
執念なんでもものは  
哀れな女たちの意地  
その気になれば  
あなただって  
化けて出られる

けだるい夏  
なんて仰有らずに  
ショートパンツに  
袖なしブラウス

裸足で飛び出してごらんなさい  
墓場にだって  
陽は照るもの

(前同)

いめえじ

詩人の専売  
だった  
のは  
遠い昔  
の  
ことだ

近頃

では  
デパート  
まで  
行かなくても  
角の  
煙草屋で  
売って  
いる

(前同)

## 千里眼

そこに座ったまゝ  
地球の上の隅から隅まで  
時には月の裏側まで  
手にとるように  
見えるというので  
それで君は得意なのだね  
もつともだ　良く分かる  
そりやア嬉しかろうとも

ヴェトナムの少年に向けられた銃に怒り  
ソウルで逮捕された学生に感動し  
沖繩を飛び立つB52に身をふるわせ  
オランダで殺された日本人商社員の犯人を推理し  
中ソの反目をなげき  
印度とパキスタンの紛争を悲しみ  
公共料金の値上げから

有名女優の離婚話や

長島の調子の心配まで

いや 御苦労さん

お忙しい事ですなね

大きな目だ

何から何まで映し出す

鋭い眼光 鉄壁もつらぬく

眼ばかり ぎよろりの化物だ

顔中が眼で

眼だけしかない

四肢と胴体は退化して

腐って 溶けて 流れかけている

大脳皮質と心臓も半分故障しているようだ

千里眼なのにね

(前同)

## 新カチカチ山

いつだって こうなのだ

遠い先祖の昔からだ

お前は木の舟

俺は泥舟

背中一杯 荷を背負い

火をつけられて ころげ廻る

婆あを ぶち殺したのが何故悪い

あいつは 俺に死刑を宣告し

それでもあきたらずに  
逆さ吊りにした俺を  
なぶり者にしやがった

あゝ背中が痛む  
ひりひりいたむ

奴らが俺の背中に火をつけた  
この火傷のいたみは  
一生治りはしない

婆あ汁は 残酷だというのか  
反ヒューマニズムというのか  
俺の村を焼き 仲間を殺し

妻をはずかしめたお前が  
婆あ汁を うまいうまいと食べた奴が  
俺を狸汁にしようとした奴が

俺の青春を返せ  
俺の妻子を返せ  
俺の故郷を返せ  
俺の未来を返せ

さもなくば 俺に  
じじい汁を食わせろ

(前同)

## 地獄

鬼は留守でも  
地獄は地獄だ

地獄の外も また地獄だ  
地獄を脱ければ  
また地獄だ

所詮 地獄は脱けられぬ  
鬼も蛇も棲む 闇の中だ

なまあたゝかい  
ぬかるみの中のなら  
誰でも眠れる  
お前の地獄は  
お前が切り裂け

鬼は留守でも  
地獄は地獄だ

すーばあまん

地球上の核爆弾をあつめて  
宇宙の外の外に棄てゝ来た

(前同)

大きなぶらしで 地球の色をぬりかえた  
国境がなくなったので戦争はもう起らない

風神 雷神とおとしまえがついたので  
冬と砂漠がなくなった

政治家と将軍は失業して  
釜ヶ崎であんこをしている

あんこは気楽な稼業で

近頃では でかいまんしょんに棲んでいる

(前同)

## ペンは何の為にあるか

万年筆型の時限爆弾はペンではない  
万年筆型の望遠鏡もペンではない  
万年筆型の懐中電灯もペンではない  
しかし万年筆に 時限爆弾や 望遠鏡や  
懐中電灯に仕掛ける事は出来る

それは

小説や詩を書く為にある  
借用証書のサインの為にある  
熱い想いをのべる為にある  
圧迫者の蛮行をメモする為にある

それは

あわて者が忘れた弁当の箸である  
痴漢の眼を刺す錐である  
時には物差の代用である

それは

安保条約に署名する為にある  
核爆弾をオーターする為にある  
死亡診断書の冷めたい文字の為にある  
思想警察の黒い手帖の為にある

それは差し示す指の延長である  
コーラスの指揮棒である  
子供のおもちゃである

その他

いろんな事に使えるのである  
それでも  
ペンはペンなのである

(前同)

## アリバイ

村を焼き 橋を壊したのは  
君じゃない  
人を殺し 女を犯したのは  
君じゃない  
少年の処刑を命令したのは  
君じゃない



爆撃機に乗っていたのは  
君じゃない

ナバーム弾を船積みしたのは

君じゃない

毒ガスを製造したのは

君じゃない

捕虜を拷問したのは

君じゃない

基地を提供したのは

君じゃない

戦争賛美の詩を書いたのは

君じゃない

君の退屈で単調な毎日

君の平凡でつまましい幸福

君には アリバイがある

「ノン」と言ったのは

君じゃない

村と子供を守ったのは

君じゃない

ストライキをしたのは

君じゃない

捕虜になったのは

君じゃない

たゝかったのは

君じゃない

抵抗したのは

君じゃない

君は見て泣いた

君は読んで怒った

君には アリバイがある

観客席でコカ・コーラを売り

その利益と入場料で

爆弾をつくったのは

君じゃない

君は観客席にいただけだ

(前同)

## 何もなかった日

絶望とか

挫折とか

ニヒルとか

甘酔っぱい言葉を

飴玉みたいに

舌の先に転がしていたら

唇が少しはれてきた

夜中に目がさめたので

スタンドをつけてみたが

手淫よりほかに

することがなかった

何ということもなく

サングラスをかけ

罪人のように  
街を歩いてみた  
梅田の陸橋で  
ガソリン自殺をする  
と予告したのは  
俺だったかもしれん

今朝の新聞には  
そんな記事はなかったし  
実は昨夜  
そのガソリンを  
みんな飲んじゃって  
二日酔いなのだ

北風の奴  
気味の悪い声で  
笑いやがる  
恋人に電話しよう  
と思ったのに  
ダイヤルを  
間違えたらしい  
モシモシ こちら一〇番  
だとき

落着いている場合じゃないよ  
お巡りさん  
首をしめられているのは  
お前の嫁さんで  
しめているのは  
お前のお父っあんだ

いや 被害者は  
身元不明の浮浪人で  
犯人は リムジンで逃走

どうでもいゝんだ  
そんなこと

誰か早く  
俺を殺してくれ  
でないと今夜

本当のこと みんなしゃべっちゃうぞ

(前同)

凍っているのは

灰皿に氷が張るほど此処は寒い  
というのか 友よ

私は今 泡立ったまゝ  
氷結した能勢川を

安物のカメラで一枚撮ってきたところだ  
まったくこゝでは  
空気でさえが 凍っている

本当に凍っているのは  
灰皿の水や 北風の中の風景だけなのか  
友よ

今夜もまた 私は  
あの女の処へ行って来ようと思うのだ  
私の心が あたゝめられよう筈もないが

気違いじみた性の中に  
沈んでいるときだけ  
何もかも忘れることが出来る

革命のことや  
戦争のことや  
芸術のことや

その他 生きて行くための  
いろんなわずらわしいことや  
そんなことが忘れられる筈はない  
けれども あの女は  
私の右胸のキスマークを  
決して消さないというのだ

昨夜も私は  
唇を寄せてくる女の頭を  
胸の中に抱えこみながら  
絶望もこゝまでくれば  
と呟いていたのだが  
何故、そんなことを呟いたのか  
もはや 思い出すことも出来ない

女は私を抱きしめたり  
まさぐったり いじりまわしたり  
勝手に荒い息をしながら遊んでいたが  
私は何に絶望したのだろう  
絶望とは一体 何だったのだろう

忘れていたのは絶望で  
忘れようとしていたのも絶望

などというのは駄洒落にすぎないか  
それなら

メイド・イン・ジャパンの

ナバーム弾が

ヴェトナムで使われているのも

駄洒落の内か

佐藤栄作が猫なで声で

清く明るく正しい選挙

を説いているのも

王貞治の結婚式も

ミソもクソも駄洒落なのか

絶望なんて

いつか通り過ぎた町のようなもの

私は今、泡立ったまゝ

氷結した能勢川を

安物のカメラで一枚撮ってきたところだ

しかし友よ

凍っているのは

本当に風景だけなのか

(前同)

まさか君の、、、

スーツ・ケースに

着換えのシャツ 時間表 地図

など詰めこんだが

行先を決めていなかった

ことを思い出して

切符を買いに行くのをやめてしまった

長い小説を書いてみようと思ひ

上等の万年筆を一本

それから

原稿用紙を一抱えほど

買ってきたが

インクを買い忘れたので

TVの漫才を見ることにした

強姦した上 殺すなんて

勿体ないこと

をする奴だと思ったり

ヴェトナムの戦争は

けれども 遠い国の話

だと思ったり

選挙のときだけ大騒ぎしても

政治家なんて

どれも一緒だ 黒い霧は

はれる筈がない

と思ったり

思うそばから忘れて

新聞の上に

よだれをこぼして

居眠りしたり

何となく目が覚め

仕方なしに 波々起きて

昨日と同じような一日が  
気がついて見たら  
また夜になってしまった  
ので 明日もあるから  
と 明日も  
生きられるつもり  
の馬鹿

(前同)

うろこ

てのひらにも  
うでにも  
ときには かたやむねにまで  
さかなのうろこがついている  
あらってもなかなかおちない  
いちまいいちまい  
つめのさきまでひっぱがす  
バスのなかで  
てのひらのうろこに きずくこともある  
ねるときにも うでのうろこをみつけて  
がりがりやっている  
もしかすると  
ぼくのゐぶくろにも  
しんぞうにも  
うろこが いっぱい  
こびりついているのかもしれない



## 目

アノ目才怖レテハイケナイノダ。  
僕タチ才取囲ンデイルアノ目。

冷イ目。

ジット見ツメテイル目。

例エバ君ガ

タツタ一人デ イルト思イ

タツタ一人ノ物思イニ、フケツテイルト、

信ジテイル時デモ

アノ目ガチャント 君才見テイルノダ。

例エバ僕ガ

安酒ニ酔イ痴レ

若サアフレサセテ、歌ツテイル時モ、

アノ目ワジット、僕才見テイルノダ。

恋人ト居ル時、

仕事オシテル時、

組合大会ノ時、

何時デモ、何処デモ、

アノ目ガ僕タチオ、取囲ンデイル。

一部シジュウ、細大モラサズ、見ツメテイル。

魚ノ目ノヨオニ、動カナイ目

マタタキモセズ、表情モナク、ジット見テイル目。

ロボットノ冷イ目

スデニ人格才失ツタ目。

アノ目ニ負ケルナ!

アノ目オ、ハネカエセ!

尼崎詩人会報 No. 3 (S 35 / 2 / 1)

### あなたに送ります

使い古した古雑巾の様に  
くたくたになった、心臓から  
血泡のような 詩がこぼれたら  
あなたに 開き封でおくります  
あなたは悲鳴をあげて駆出すでしょう。

八〇〇立米のコンクリートが  
毎日 ミキサーから吐き出され  
新しい工場が出来上がります。  
そいつの重みで粉碎された頭蓋骨は  
小包にして送ります。

湾曲した背骨 ひからびた胃袋。  
みんなあなたに送ります。  
あなたの顔が歪むでしょう。  
あなたの目が潤れて ぎらぎら光る砂漠に  
なるでしょう。

その時あなたは狼です。  
暗い夜の森を、さまようのです。  
群れをなして、牙を磨き

最も脂きった奴を襲うのです。  
膨れ上った腹に噛みつくのです。

それでも あなたが変身を欲しないなら

土方や 淫売婦や ルンペンの

陽気な呪いを

犯された女や 犯した男の

悲しい時間を

坑夫や漁師や 農民の

あらくれた憎しみを

掻っばらいや 人殺しの

孤独な幸福

毎日 お届けしましょうか。

尼崎文学通信第七号 (S 35 / 2 / 18)

## 時間

時間が黒い服を着て通りすぎました。

僕の靴がけとばしたしあわせは、運河の底に

沈んでいます。

あすこには、生あたゝかいせいかつがあります。

魚の死骸や、ビール瓶の破片や、片耳分のイ

ヤリングや、小銭の入った財布や、台風のと

き吹飛ばされて来た屋根瓦が居心地よく暮し

ています。

時間が通りすぎた後で、僕は蒸発して天に昇

ります。

天は何処までも高いので、僕もかぎりなく昇って行きます。

時には疲れて地上が恋しくなりますが、僕にはもう足がありません。

時間をとりもどさねばなりません。

僕が僕であるために、

僕のノートの余白に、金銀の文字をぎっしり

書きこまねばなりません。

通りすぎて行った時間でなく新しい時間が必要です。

赤く赤く燃え上がる時間です。

運河の底を焼き儘す時間です。

僕は、僕は、僕は……。

生きたいのです

どんなに不幸な時間でも

どんなに暗い時間でも

尼崎詩人会報 No. 6 (S 36 / 6 / 1)

## 地図

愚かなることかな

つれづれに街へ出づれど

なすこともあらねば

君が住む町の地図を買い来て

あかず眺めぬ

君はここ

こは 君が朝夕通い給う道

かのとき 君が青き大粒のぶどう買い給いし

店はここなり

ひととき君と語らいし喫茶店はここ

その喫茶店のマツチ 我が万年床の枕許に

今もあり

されど そは遠き町なるかは

目閉ずれば その町はあり

目開けなば ひとひらの地図のみ

指もてたどれど 詮なしや

ただ かさこそと ひそけき音す

電車を乗りつぎて行かば一時間余りならむ

されど そは遠き道なるかは

面影は胸にあれども

君ここになし

かくてまた 今日も昏れなむ

哀れなることかな

『AMAZON』第一〇四号（S46/5/1）

「限りなく六月（第八回）蠅螂の斧」の文中詩

大阪文学学校の開校十周年のパーティに熱愛の相手

田辺鮎子（作中人物）が来なかつたことから、途中で

抜け出た私こと日野善太郎は、鮎子の家を訪ねる。

彼女は疲労のためか寝込んでいた。私は枕許に

座り込んで看病した。彼女の身体がとても小さく

見えて悲しかった。私の看病を彼女は喜び、私も

また好きな女性の為にそうすることが出来たのを

幸せに思った。

その夜、私はまた泊ってしまい、次の日一日、本を読んで暮したが、修一君と三人で夕食をとっておしゃべりしている内におそくなって、もう一晚泊ってしまうことになった。似たようなことは何度もありながら、肉体的には決して結びつかず、そんな状態が続き、私は「地図」という詩を書いた。(四行略)

《詩・地図》

年の暮れも近づいた或る夜明け前、私は例によって彼女の家に前の晩から泊り込み、一番電車で帰ろうとしていた。いつもなら、そんな時、夜の遅い彼女に替って、私の為に朝食を作ってくれるのは修一君の役目であった。その朝はどうしたわけか、彼女が起きて朝食を作ってくれた。あたたかい味噌汁の湯気が和やかで、羽織をひっかけて給仕してくれる彼女は美しかった。私はごく自然に手をのばして彼女の肩を抱いた。

「駄目よ、いけません」

と言いながら、彼女は身体を前におりまげた。私のくちびるは、彼女の耳の下から頬のあたりに移動しながら触れた。言葉は拒否の言葉であったが声も身体も、決して拒んでいないのを私は感じた。そう感じた瞬間に、何故か私は彼女から離れ、さよならと言った。またねと彼女が言った。

※ ※ ※

ちなみに『AMAZON』第四五号(S41/2)の「雑記・息子よ」の筆者田近愛子が「田近愛子」と誤記(ガリ版)されておもしろい。奇しくも田近愛子に始まり田近愛子に終わる詩集となった。

全二十三篇の詩の中で最も古いのは「うろこ」で日野善太郎三十歳の時の作である。彼が尼崎に漂着したのは昭和三四年八月二十一日で、そのわずか三か月後に発行された尼崎詩人会報No.2に載せられたことになる。詩人会員十九名のうちの一人に高島洋がいた。日野はこの年の末に会員になったという。日野は尼崎に漂着してすぐ「新日本文学読者会」の代表としてこの文学サークル交流会に出席することになり、高島や田近愛子と出会うことになる。翌三十五年には早速、文学サークル交流会の世話人となり、機関紙「尼崎文学通信」の発行を手伝い詩を載せている。

「新日本文学読者会」は『変革者』と『AMAZON』の尼崎文学研究会へと分化発展する。日野が『変革者』の編集長を務めたのはNo.20までのようである。そしてNo.24(S44・2)で「文学アンデパンダン」論を最後のものとして十年近い『変革者』での活動に終止符を打ち『AMAZON』に移る。日野なき『変革者』は《活動家集団・思想運動》に加盟する。自分の詩十七篇を載せたのが編集長としての最後の仕事No.20であることは興味深く、注意を要する。この段階では他の同人との乖離は決定的なものがあったはずであり、単なる自己顕示ではありえず、十七篇の詩の連鎖は他の同人達への批判と決別を暗示したものであると言えないだろうか。(中岡)

## 日野善太郎の詩

非売品・限定五〇部発行

発行：〒709-0812 赤警市沼田四六八一

中岡 光次